サマセット・モームのシンガポール

西原大輔

はじめに

人口僅か三百万人弱の小国シンガポールにも、シンガポール文学というものが存在する。毎年いくつかの小説が誕生し、小さいコーナーながら、本屋の一角を占めている。平凡な作品も多いが、キャサリン・リムやボニー・ヒックスの小説などの傑作もあり、世界文学の中の一部として、シンガポール人作家の作品が意識されるようになるに違いない。一九六五年に独立したこの若い国家も、以前は大英帝国の植民地として、一時的居住者の集合地に過ぎなかった。しかし独立後、民族を越えた共通の文化を作り出すようになってきている。本論文は、このシンガポール文学の前史として、シンガポール植民地人が文学作品にどう描かれてきたのかを検証するものである。シンガポール人によるシンガポール文学が生まれる以前、この地に帰属意識を持たない作家が、シンガポール人をどう描いたのか。ここでは、サマセット・モームを取り上げ、検討してゆくことにする。

一、モームの描いた南洋華僑

Singapore is the meeting-place of a hundred peoples;

（訳）

シンガポールは様々な人種の出会う所。

シンガポールを見事に言い当てたこの言葉は、サマセット・モーム作「手紙」(The Letter)[1]の冒頭部分にある。シンガポールが多民族国家だというのは、今日でも繰り返し言われることであるが、モームは自分が作ったこのシンガポールの定義

が、随分気に入ったのであろう。「東洋航路」(P.& O.)という小説[2]でも、"Singapore is the meeting-place of many races."と、似た表現を用いている。様々な人種の出会う所と言っても、もちろん、白人だけ、黄色人種だけの都市ではない。

ありとあらゆる色をした人間たち、黒いタミル人、黄色い中國人、褐色のマレイ人、アルメニア人、ユダヤ人にベンガル人、それらが互いにやかましい調子で呼びあっている。[3]

この国際都市シンガポールを舞台とするサマセット・モームの「手紙」は、ある殺人事件を描いた短編小説である。この作品には、オン・チー・セン(Ong Chi Seng)という広東人が登場する。モームは、太平洋地域を舞台にした作品を数多く残したことで評判が高いが、アジア人が重要な登場人物となることは、比較的珍らしい。多くの場合、舞台となるのはアジア植民地に生きる白人の世界であった。もちろん、皮膚が白くない人種も出てくる。しかし、それは大体、作品に異国情緒的色合いを添えるための風景的役割に限定されていることが多い。また、支那人コックや支那宿の主人のような人間が登場することもあるが、いわば、主人たる白人とは身分の違う人たちであった。従って、アジア人が自分の名前を掲げてモームの世界に現れるのは、比較的特殊な例と言わねばならない。

もっとも、そのような例が「手紙」にしか見当たらないわけではない。『月と六ペンス』では、ゴーギャンに擬せられる画家ストリクランドがタヒチで結婚したポリネシア人には、アタという名が与えられている。また「片隅」(The Narrow Corner)には、キム・チンという中国人が登場する。[4]しかし、この手のものは依然少数に属することは否定できないのである。この点からすると、モームに固有名詞を付与され、一つの人格として形成されたこのオン・チー・センなる中国人は、稀な例として注目されるわけである。以下、この登場人物がどのように描かれたか、検討してゆく。

弁護士ジョイスの下で働くオン・チー・センは、まず、有能で好ましい人間として小説に姿を現す。

There was a knock at the door.

'Come in.'

A Chinese clerk, very neat in his white ducks, opened it.

'Mr Crosbie is here, sir.'

He spoke beautiful English, accenting each word with precision, and Mr Joyce had often wondered at the extent of his vocabulary. Ong Chi Seng was a Cantonese, and he had studied law at Gray's Inn. He was spending a year or two with Messrs

Ripley, Joyce, and Naylor in order to prepare himself for practice on his own account. He was industrious, obliging and of exemplary character.(5)

(訳)

ドアにノックの音がした。

「おはいり」

さっぱりした白麻服すがたの中國人書記が、ドアを開いた。

「クロスビイさまがお見えになりました」

書記は一々の語に的確なアクセントをつけて、實に綺麗な英語を話す。ヂョイス氏はこの男の語彙はどれほど豐富なのだろうと訝つたことが一度や二度ではない。オン・チ・センは廣東人で、グレイズ・インで法律を勉強した。いずれ獨立して辨護士を開業する下準備に、リプレイ・ヂョイス・ネイアラ法律事務所へ入ってから一二年になる。勤勉で、他人に親切で、まず模範的な人物である。(6)

このシンガポールの華僑は、主人公ジョイスの法律事務所に勤める事務員である。机を前にした仕事に従事しており、体が資本の苦力とは一線を画した、ホワイト・カラーだ。暑い日ばかりが続く熱帯にいながら、白いズボンをきちんとはき、'Mr Crosbie is here, sir.' と、きちんとした言葉遣いをする。美しい英語を話し、アクセントは一語一語に至るまで正確で、ジョイスさえ彼がどれほどの語彙をものにしているか図りかねているほどなのである。しかも、この法律事務所で経験を積み、ゆくゆくは独立を図ろうとする野心家だ。性格は勤勉かつ親切、まさに申し分ない人格の持ち主なのである。

この人物の名だが、漢字ではどう書くのであろうか。広東人だという記述とOng Chi Sengという表記から考えて、Ongは王、Chiにあたる字は数多く、例えば、志・致・痴、があり、またSengは成・城・星・醒・腥等が考えられる。漢字の組み合わせからして、志が成就するという意味を持つ、王志成というのが、最もありそうな名前ではないかと思う。もしそうだとすると、姓名からして、志の高さを表していることになる。もっとも、これは私の推測に過ぎない。作者モームがここまで計算して名前を当てたか、それとも中国人らしい名を適当に付けただけなのかは、今となっては知りようがない。しかし、王志成というのは実に性格と一致した名前ではある。

さて、肯定的イメージと共に登場したオン・チー・センであるが、二度目に現れる時は、少し様子が変わってくる。読者にはまだ知らされないが、勤勉なる華僑は、実はその優れた知恵を働かし、雇用主ジョイスの友人をゆすろうと企んでいるのである。次の引用は、オンがジョイスに対して、内々

に話したいことがあると切り出す下りである。今回も先程と同様にノックの音から始まるが、勤勉と親切の二語だけでは説明できない描写が加わっていることが注目される。

（訳）

ドアにノックの音がした。

「おはいり」

中國人の書記が入つて來て、ドアをしめた。そのドアを、彼はものやわらかに、しかも愼重に、だが斷乎として閉め、ヂョイス氏のいるテエブルの方へ進んで來た。

「ちよつと個人的なお話で、お邪魔をしましてもよろしゆうございましようか？」と彼は言つた。

この書記の使う言葉の手のこんだ正確さは、いつもヂョイス氏を少しばかり面白がらすのだが、いまも氏はそれを聞いて微笑んだ。

「べつに邪魔ではないよ、チ・セン」と彼は答えた。

「これからお話したいと思います問題は、先生、微妙で、祕密を要することでございますが」

「話したまえ」

ヂョイス氏は書記の俊敏そうな眼と眼をみあわせた。いつもの通り、オン・チ・センはこの地方の流行の尖端を切る服装をしていた。ピカピカのエナメル靴に、派手な絹のソックスをはいている。黒い襟飾には眞珠とルビイのピンをさし、左の藥指にはダイヤの指環をはめている。清潔な白い上着のポケットから、金の萬年筆と金のペンシルとが覗いている。彼は金の腕時計をはめ、鼻柱には縁なしの鼻眼鏡をかけている。彼はかるい咳ばらいをした。

'May I trouble you, sir,' と切り出したオン・チー・センの言葉は、先程と同様、慇懃かつ正確で、ジョイスのお気に召す。雇用主は、'It's no trouble Chi Seng,' と、彼の忠実なる下僕のファースト・ネームを呼び、親愛の情を示す。この中国人の、'May I trouble you, sir,' の一語から、実は大変なトラブルが起きることを、ジョイスも読者もまだ知らされていない。そして、問題の言葉が発せられた後、王の描写に変化が生じる。まず、「オン・チー・センはいつものように当地のファッションの最高のものを身につけていた。」と、小説の冒頭で形成された彼の身だしなみの良さが確認される。

しかし、これに続く部分は、キンキラと輝く高価な光り物ばかりを無節操に身にまとう王の姿が描かれる。曰く、「ピカピカのエナメル靴」「派手な絹のソックス」「黒い襟飾には眞珠とルビイのピン」「左の藥指にはダイアの指環」ポケットには「金の萬年筆と金のペンシル」「金の腕時計」。ここまでくると品のない成金趣味としか言いようがない。第一回目の部

分では、白いズボンが彼の人格の高潔さと映えあって効果を上げていたのと、良い対照である。実際、帰属する国家を持たない華僑は、自身と家族の安全のため、いつでも着の身着のままで逃げられるよう、貴金属を常に身につけるのが普通であった。今日まで続く、このさまよえる民の知恵を、モームはよく観察していたのであろう。この中国人が、ゆすりの種たる手紙を取り出したのは、シンガポールドル紙幣で分厚くなった財布の中からであった。

三度目の描写も、ドアのノックから始まる。オン・チー・センが、ジョイスの友人クロスビーの夫人による殺人隠蔽を嗅ぎ付け、犯罪の重要な証拠となりうる手紙を、一万ドルで売っても良いとの取引に出る場面である。ここでは、勤勉で有能な部下という期待が裏切られると同時に、流暢な英語を話す人間という作品冒頭の設定も裏切られる。

'Is there anything you wish me to say to my friend, sir?'

Although Ong Chi Seng spoke English so admirably he had still a difficulty with the letter R, and he pronounced it 'fliend''.

(訳)

「何か、わたくしの友人に御傳言がございましようか?」

オン・チ・センの英語は實に見事だつたが、やはりRの發音は不得意だとみえ、friend が fliend と聞こえた。

これまでは、王の英語の正確さが強調されてきた。言葉の上では英国人と全く区別できないほどであったのだが、この中国人が、クロスビーの弱みを握り、彼が準備できるぎりぎりの額一万ドルをふっかけてくるに及んで、作者モームはオン・チー・センの発音のおかしさを読者に印象づける。王はやはり非英語圏の人間だと、読者は意識するのである。以前王の intelligence に関心したジョイスも、ここでは彼を王を clever fellow と表現する。これ以降、王志成は共謀者たる友人を my fliend と呼び、表記もRでなくLが使われ、彼が話すごとに、読み手はこの異様な綴りにつきあわされる。読者は、この奇妙なスペリングの反復によって、オンとの間の心理的距離を拡大することになる。車が取引の現場に着くと、オン・チー・センは、ジョイスとクロスビーに外で待っているように言いつける。

'You wait here, sir. I go in and speak to my fliend.'

(訳)

「ここでお待ち下さい。わたくしがさきに入つて、友達に

話しますから」

ここでも、'You wait here'、'I go in'と、単語をぶつ切りに並べた英語で、おまけにfliendと発音するのである。田中西次郎訳は右の通りで、「お待ち下さい」「わたくし」と丁寧な日本語にしてある。これを、オンの語法の舌足らずな点を強調して極端に訳せば、「先生、ここ、待つある。わたし、入って、友達に話すある。」とでもなるであろう。ジョイスが忠実な植民地の下僕に裏切られると同時に、読み手は、作品の冒頭で強調された王志成のアクセントの流暢さと語彙の豊富さにも裏切られるのである。冒頭で発音の正確さを描いたのは、実に巧みな伏線であった。後には彼の友人の弱みにつけこむゆすりと化す。このとき、中国人の英語は、主人公にとって異様なものと意識され、心理的隔たりを助長することとなる。

これには、三つの解釈がありえよう。ひとつは、王志成の言葉使いが場面によって変化したという見方である。つまり、イギリス人の弁護士の前では、仕事の性格上、王志成がなるべく正しい発音を心掛け、立派な英国英語を使っていたのであるが、金もうけの段になり、中国人同士で会話をおこなう時は、今日でもシンガポールで広く聞かれる中国語訛りのいわゆるシングリッシュが、彼の欲望に捕らえられた感情を表現しやすい言葉として口をついたと見る。これが一番目の解釈。もう一つは、一人の人間の言葉がそうすぐに変わるはずもないとする考え方である。王志成の英語に変化はなく、Rの音をしばしばLと発音していたのだが、忠実な部下がゆすりに豹変したため、主人公の心理的な要因に左右され、小さな発音の異様さが耳についたとする。そして第三の解釈は、「手紙」の筋の展開の各場面で異なったオンの形象が必要となったため、テキストに裂け目が生じ、不整合な作品となったという考え方である。発音の上手なオンと下手なオン、この二つの相容れない描写が、矛盾したまま同居していると見るのである。

いずれにせよ、この小説の中で、オン・チー・センなる華僑は、人の弱みに目ざとく付け込んで、巧みに金を設ける役をあてがわれている。このオン・チー・センを通じて、華僑のある種の傾向が充分に表現されているのではなかろうか。まず第一に、彼は勤勉で知的であった。英語を操り、法律事務所の開設を考えている野心家である。第二に、金欲も大変強い。身につける装飾品は金づくめで、人の弱みに付け入ってまで金儲けを企む。第三に、その際、友人とのコネクションを最大限に活用していた。勤勉・金欲・コネクションの三要素は、南洋華僑の全体的な傾向を十分反映するものである。サマセット・モームが作品に描いたシンガポール人は、以上のようなものであった。

二、モームと植民地の白人

ここで、サマセット・モームの実際のシンガポール体験について、一つのエピソードを紹介したい。モームが始めてシンガポールに上陸したのは一九二一年、その年は英領マレーを始め、東南アジア一帯を旅行した。「手紙」創作の契機となったある事件の話を耳にしたのも、この旅行中である。[7] 一九二五年の再訪に次いで、第二次世界大戦後は一九五九年と六十年に再び立ち寄っている。彼の名前はSomerset Roadという市内の通りの名前にもなり、また、モームがラッフルズ・ホテルの七十八号室（現百二十号室）に滞在し、執筆のための書斎として使っていたことはよく知られている。高級ホテルに滞在し小説を書く作家というのは、何か優雅で、古き良き時代の南洋に生きた英国人の代表のように誤解される節もある。

しかしモームは、シンガポールで名士ぶっているイギリス植民地人には、我慢がならなかったようだ。シンガポールのタングリン・クラブ[8]において、彼は、目前につどう植民地の英国人を痛烈に罵倒してつまみ出されるという経験をした。熱帯の酷暑と湿気のため、上着もネクタイも着用していなかったサマセット・モームと紹介者フランス・シュッツマン（Frans Schutzman、ラッフルズホテルのマネージャー）は、入り口で入場を断られた。何とか入ることを得たこの大先生、スピーチの時に部屋を見回し、恐ろしく大きな声でこう言い放った。「ここの人達を見て、私は、本国の召使が滅多に戻って来ないことが、もはや驚きではなくなった」。[9] 南洋で羽振りを利かせる紳士気取りの白人を、召使同然の輩の罵ったこの発言は、シンガポールのイギリス人の痛いところを突いたに違いない。結局モームは会場を追い出され、この作家をクラブに紹介したシュッツマンは、すぐさま「好ましからざる人物」のリストに載せられてしまったのである。本国のあぶれものが東洋の植民地で、時としては不正な手段で、ひと財産こしらえ、気取ってクラブなどに出入りするという例は、いくらでもあったことだろう。[10]

もっとも、植民地人側の言い分にも理がないわけではない。彼はマラヤ連邦を舞台にした二つの短編集The Casuarina Tree（一九二六）、Ah King（一九三三）において、実在の人物や団体をはっきりと作中に示しすぎた。「手紙」からして、その代表と言うべきものである。実際の殺人事件は、一九一一年四月二十三日に起きた。小説の中で人を殺したLeslie Crosbie は、実在のMrs. Ethel Mabel Proudlockであり、作中の被害者Geoff Hammondは、William Crozier Stewardだという事までわかっている。殺された男に中国人の妾がいる所も現実の事件そのままで、モームが変更を加えた所は、殺人の当日に女が男に

手紙を出していたという点と、小説では女は放免されるが、実際の裁判では絞首刑になった点ぐらいだとされている。[11] 作品が発表された時の、事件関係者の驚きが想像されよう。モームが小説に仕立てたため、この二人の名は、何のかかわりもない日本人の論文にまで引用される不名誉に浴することになってしまった。

一九三八年六月七日のストレーツ・バジェット紙（Straits Budget）は、植民地人の気持ちをこう伝えている。

この地域に広く見られる、サマセット・モームに対する根強い偏見について分析してみることは、大変興味深い。モーム氏がこの地方の醜聞を取り上げて、まことしやかな短編を作ったことが原因だと普通説明されているのだが、第二の要因としてモーム氏が、殺人だの臆病だの、それに酒乱・隠遁生活・姦通といった、マレーシア欧州人の生活の、滅多に見られないような悪い面ばかりを語ってきたことがある。彼はいつも決まって不愉快なことばかりを、皮肉っぽく強調するのであった。マレーシアで普通の暮らしをしている白人が、男も女も、何かほかの点に地方色を見いだしてほしいとモーム氏に願うのも、無理からぬことである。[12]

モームは植民地人のこのような思いを知ってか知らずしてか、彼らを痛罵してやまない。「作者のあとがき」[13] でモームは、東洋の植民地で生活するイギリス人を評して次のように述べている。

これらの短篇小説では、そのなかの出來事が起こった場所は、シンガポオルだけを例外として、すべて架空の地名を用いた。シンガポオルは繁忙な大都會だから、つまらぬことを氣に病んでいる暇などはないが、支那海の波の打寄せる國々に散在する小社會はなかなか敏感で、そこに住む人人の生活事情が、かならずしも彼等の從姉妹たちや伯母さんたちの得々として安住している偏狭な本國の社會から是認してもらえそうもないことを、小説のなかなどでほのめかされるようなことがあれば、大問題になるだろう。廣い東洋で彼等の人生の最良の時期を過ごしているイギリス人が、故郷の村の小さな政治問題などをさも重大そうに考えている事實を發見するのは、旅行者にとつて、まつたく驚愕に値することだ。時には彼は、これらの人々はベドフォード・パアクあたりで餘生を樂しみたいばつかりに、遠い異境のセレベスまで出稼ぎに出ることを何とも思つていないのだろうかと、怪訝の念に打たれることさえあるだろう。彼等はみな實際的な事柄にしか關心をもたない實際的な人たちだから、作家の想像力というものをあまり重んじ

ない。それで作者がどこそこの土地を訪ねたとか、誰それと逢ったとかいう知識だけで、彼の創作した人物は單に彼等の肖像畫を描いただけのものだと、あっさり結論してしまうのである。

東洋という大きな世界のただなかに居ながら、彼等はまるで田舎町の住民のようにせせこましく暮らしているので、田舎町ふうの缺點や弱點からまぬかれていない。だから小説作者が作中に登場させる人物――特にそれが卑劣でつたり、愚かだつたり、邪惡だつたりすると、それらの人物のモデルをさがすことに性のわるい樂しみを味うらしいのである。

東洋人には支配者として西洋の代表のように見られていた植民地イギリス人も、モームのような本国人からは、軽蔑されるべき別人種のような扱いをされている。彼らはモームの筆にかかると、「せせこましく暮らしている」「田舎町の住民」になってしまう。シンガポールのような植民地に生きる白人にしてみれば、遠いアジアで暮らす自分たちが、本国の人々に受け入れられるかどうかは、一種最大の関心事ではなかったろうか。東洋人を下に見ていたイギリス植民地人が、今度は本国人から退けられる。アジア人からすればイギリス人である彼らも、本国人には南海の人と見なされる。モームはこの南海に生きる白人達を罵りつつも、好んで作品の材料に取り上げた。本国との関係という、西洋対東洋の単純な図式だけではとらえきれない現実が、植民地には確かに存在していたのである。

おわりに

モームの描いたシンガポールの白人達は、東洋の支配者であって、アジアから見ればよそ者ということになる。しかし、「手紙」に登場する弁護士ジョイスにしろ、クロスビーにしろ、彼らは駐在員でも外交官でもなく、生活基盤をこの地に持つ住民であった。オン・チー・センのような華僑も、東洋人とは言え、結局は白人達と同様の移民であり植民者なのである。ここに、植民地シンガポールの複雑さがあると言えよう。東洋対西洋の視点では収まり切らない生活が、ここでは展開されていたのである。英国からも中国からもはみだしたこの部分が、後にシンガポール文学という新しい意識を生み出す種になったと言えよう。

注

（1） サマセット・モームの「手紙」は、一九二六年発行の“The

Casuarina Tree”の一部として発表されている。

(2) 「東洋航路」は、小川和夫訳の邦題（英宝社『モーム傑作選』）。田中西二郎訳では、そのまま「P.& O.」が題になっている。

(3) 田中西二郎訳による。『W・サマセット・モーム全集』第十六巻、新潮社、昭和三十年六月十五日。以下同じ。

(4) その他、『中國風の屏風』（“On a Chinese Screen”）も注目される。

(5) W. Somerset Maugham, “Collected Short Stories Volume 4” (Penguin Books, 1963). 以下原文の引用もこれによる。

(6) この本では、Ong Chi Seng をオン・チ・センと表記しているが、チーと長音にする方が原音に近い。Chi という綴りを日本語のローマ字式に「チ」とあてたのだろう。

(7) この旅行中、モームは「手紙」創作の契機となった、ある事件の話を耳にした。詳細は、Robert Calder, “The Life of W. Somerset Maugham,” (Cox & Wyman Ltd., London, 1990.), P.167. を参照。

(8) Tanglin Club. シンガポール市内、Stevens Road に今日も存在する。

(9) Robert Calder, “The Life of W. Somerset Maugham,” (Cox & Wyman Ltd., London, 1990.), P.361.

(10) 永井荷風は、シンガポールの港で見た「役人らしい人相の悪い西洋人」の姿を、『ふらんす物語』（明治四十二年三月）の中に書きとめている。

(11) Ted Morgan, “Maugham,” (Simon and Schuster, New York, 1980.), P.253.

(12) Ibid. P.251. 翻訳は論者による。

(13) 田中西二郎訳『W・サマセット・モーム全集』第十六巻、新潮社、昭和三十年六月十五日、より引用。